

I

ウガンダの東部、ケニアとの国境にほど近いトロロ県でアドラ民族 (Jo-P Adhola 以下民族名の接頭辞をすべて省き「アドラ民族」「テソ民族」とする) の調査に従事していた一九九八年、長島信弘先生がウガンダに来る、という知らせが村に届いた。JICA国際協力事業団(当時。現在はJICA国際協力機構)の事前調査。「貧困撲滅戦略の構築と農村の総合的發展」というプロジェクトだった。北東部テソ民族と中央部、そして西部の三箇所を実態調査、比較する予定だという。

八月二五日に空港まで迎えにいった大使館の内山さんの先導で首都カンパラにあるシエラトン・カンパラ・ホテルのロビーに到着した一行は、プロジェクト・リーダーの長島先生のほか、JICAケニア事務所の宮川昌明所員、平原専門員、飯田専門家、田原範子さん(四天王寺国際仏教大学)だった。ロビーでそれを迎えたのは松田素二さん(京都大学)、河合香更さん(静岡大学、当時)、波佐間逸博さん(京都大学大学院)、そしてあわてて村から出てきた私だった(うち、松田さん、河合さん、波佐間さんはケニアから駆けつけた)。私は先生と握手して、初対面の人々に自己紹介した。

「長島先生のところの学生で梅屋といいます。松竹梅の「梅(うめ)に屋根の「屋(や)と書きます」

この自己紹介のクリシェに長島先生はすかさず「それに、不潔の「潔(けつ)」と続けた。みなどう反応したらいいかわからずあいまいな笑みを浮かべている。

「あと三〇分ほどでこのロビーに集合して大使館²でブリー



歓迎を受けるJICA事前調査団一行
(1998年8月)

アチヨワ事件簿 —あるいは『テソ民族誌』異聞



オウゾロットの指示で山羊を屠るアチヨワの人々

フィングです。やつと着替える時間があるくらいですが」大使館の内山さんの説明に「もう着替えねえよ、日本の常識は世界の非常識だつてことを大使館の人にももつとわかつてもらいたいなあ」と長島先生は呟き、「田原さんも着替えなくていいですよ」と、ジーンズからスカートに履き替えようか悩んでいた田原さんにささやく。これには、大使館、JICA関係者は苦りきっていた。

「私もフィールドに同行できますか?」「たぶん大丈夫だと思ふ」内心ごどろした。

こうして、事前調査に便乗して、カタクワイ県(デイストリクト)、カペレビヨン・サブカウンティ、アチヨワ・キャンプをたずねた。

トロロのロック・ホテルで昼食をとつた。その昔まだJICAが、OTCA海外技術協力事業団だった当時の専門家、森淳先生(大阪芸術大学)と長島先生がはじめて出会った場所である。全員アレーン・オムレツ。そのほうが早く注文品が出てくると思つたのだが、その逆で、オムレツ用のフライパンの数が限られているので、ずいぶん手間取

つた。この厨房で料理していたのは、私が調査基地にしている村から通つているオケチヨというアドラ民族のロックさんである。

ソロテイ・ホテルで前泊して向かつたアチヨワ・キャンプ。そこには、先生の著書、『テソ民族誌—その世界観の探求³』(以下『テソ』

と略す)で読んだことのある人物が三〇年近い年齢を重ねて生活していた。ステイヴン・オウジロットや弟で先生の助手をつとめたオコリモ⁶が生身の体を伴って存在していた。もつとも、アチヨワ・キャンプは、本に描かれているフィールド、「ウスク」ではない。一九七一年のクーデターによるアミン政権成立以来、ウガンダの治安は乱れ、『テノ』のなかではウスクで公務員をしていたオウジロットも、家族を連れてキャンプに移住していたのだ。ここには一人暮らしの老人も多く、もはや『テノ』で描かれた「エテム」「アテケレ」や「エケキ」「エカレ」といった原理に支えられた社会ではなかった。

「ここが、世界で一番安全なところですよ」一行に告げる。おそらくは、三〇年来の友人オウジロットの住まいは、先生にとってはそうなのだろう。単純な比較はできないにせよ、果たしてそのようなつきあいがこれからの私とトロロの友人との間で生まれるだろうか。素直に感銘を受けた。「この出された椅子に座らないと大変な失礼に当たります」小屋の奥から木製の折りたたみ椅子がいくつも運び出された。屋敷の片隅ではオウジロットの指示で山羊が屠られている。

その後一行は役場で説明会を開いたようだが、「君は正式のメンバーではないから遠慮してくれるか」とのことばもあつて、オウジロットの長子のダニエル・オチユネの案内でテノヒール(アジヨン)を飲みに行った。

II

当時一橋大学大学院博士課程に在籍していた私は、一九九七年から長島先生と縁の深いウガンダでの調査をはじめ

梅屋 潔 ●東北学院大学教養学部准教授

うめや・きよし◎1969年静岡市生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了。一橋大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。ウガンダ・マケレレ社会調査研究所外来研究員、マケレレ大学社会学部客員研究員。JICA国際協力事業団専門員、日本学術振興会特別研究員(平成8年度DC2、平成14年度PD)を経て、2005年より現職。社会人類学・文化人類学専攻。憑依・妖術信仰などを中心に文化的秩序観念を研究。共著書『憑依と呪いのエスノグラフィイヤー』『文化人類学のレックス・フィールドからの出発』。



アチヨワヨでテノの子供たちと
(1998年8月)

1. ◎は、「人々」をあらわす接頭辞で ◎は「場所」をあらわす接頭辞である。長島先生は、著書で「テノ」「テノ人」「テノ族」としてきたひとつを最近「人々」をあらわす接頭辞を加えて「アチヨワ民族」と呼ぶようになった。そこには深い洞察があると推察されるが、わたしは本稿では自分の調査する民族の表記法と同じように、民族の接頭辞をすべて省き「テノ」ないし「テノ民族」あるいはなじみのある「テノ人」としたい。それは接頭辞を省いた「バガンダ民族」(Gusii「人々」)や「バガンダ民族」(Gusii「場所」)よりは「バガンダ民族」の方が混乱がより少なくなるという判断による。事には長島信弘「解説」ジョン・ロスコ―著、長島信弘、松本陽子訳『ブラック・アフリカの魂』(一九七七年、集英社)とほぼ同じ論拠であることに気がついた。
2. 正式にはケニアと兼轄されており、当時大竹米蔵臨時大使が駐在していた。
3. 長島信弘「テノ民族誌—その世界観の探求」(一九七二年、中公新書 以下「テノ」)。
4. 『テノ』での表記はクマフエン・オウジロット◎言だが、本人の自筆が現在◎言であること(◎はひとつ)、長島先生も最近はおシロットと表記しているが私の耳には単音◎(◎)ではなく二重音◎(◎◎)と聞こえることなどから本稿では◎言とする。
5. 『テノ』ではオコリモ。同じく自筆◎言◎と綴っていることなどは根拠だが、この指摘に対し長島先生からひとつは英語の影響による変化であり、オコリモの語の一部であるエモンには、本来特別な意味があると聞かされた覚えがある。

ていた。最初の調査は健康を害して失敗。第二回目は一年ほど継続して滞在することが出来たが、日本学術振興会の特別研究員(DC2)としての資格は一九九九年三月末日で終わろうとしていた。滞在費はもはや赤字。大家さんに家賃を待つて貰つていて結果的にはウガンダ人に借金しているような状況だった。せつかくフィールドにも馴染んできたのに、このタイミングで帰国したくなかった。帰国したあと追調査をおこなう費用の当てがあるわけでもない。いや、帰国後の生活費の当てもまつたくなかった。待つてゐるのは身内への返す当てのない借金だけである。それまでトロロ県では、DANIIDAやunicefの調査や援助プロジェクトに慣れきつた住民を前に研究計画

の説明に毎回失敗し、「お前のプロジェクトは俺たちに何のメリットを与えてくれるんだい」と聞かれ困っていた私は、帰国寸前の長島先生におそるおそる聞いてみた。

「なんとか、トロロ県も比較参照点に入れてはもらえませんか。人口密度も昔から高いし、HIV感染率も深刻でこのプロジェクトにはびつたりだと思うのですが。そうすれば、私もこのプロジェクトに何らかのかたちで関わることのできるのですが」

「そんな可能性はありません。予定に入っていないから」ぴしやりと撃退された。リサーチ・プロポーザルをいくつも書くようになった今は、この申し出がいかに非常識で、先生の拒絶がいかに当然だったか理解できる。

それでもいろいろお考えになったのだろう。いくつか手を打つてくれたようである。しかし、まだ何の成果も挙げていない大学院生を公的なプロジェクトに関わらせることには反対も多かったらしい。非公式に説得材料をつくる意味もあったのか、その約四ヶ月後の一九九九年一月上旬から約三ヶ月のあいだ、長島先生の現地調査のお手伝いをすることになる。いわば私設助手である。このことがほぼ決まり、知らされたのは、事前調査団が九月六日にウガンダ・エンテベ空港をとびたち、日本に帰る前日、九月五日の夜のことだった。

こう書くともまるで「金目当て」のようだが、事情は少し異なる。本誌「自著を語る」で長島先生が言及しているように、私は先生の『テソ』を古本屋やウェブ上の「日本の古本屋」などで計五冊手に入れ、繰り返し読んでいた。マニアである。複数買い求めたのは定価二八〇円のこの本の値が上がることを見込んでのことではない。繰り返し読む



オウジロツットの長子ダニエル・オチユネ (1998年)



アチョウ・キャンブで。テソビールを飲む (1998年)

のですぐに傷んでしまうからである。

この本には、通常書かれることの少ない調査の具体的な手続きや経緯がこと細かに書かれていた。はじめて海外でフィールドワークを行おうとしていたときにはなおさら、この本の記述が参考になった。この点、人類学者自身が透明人間のように扱われていた通常の民族誌や、形式的な調査入門書とは、一線を画していると思われた。そこには著者が調査者として直面する資金繰りの問題や現地の人びとの葛藤や悩みがあった。異文化を理解することの困難も、人類学と一生付き合っていくべきかという悩みも、淡々と書きつけられていた。「テソ」だの「ウスク」だの「オジイロット」だの「オニヤ」だの、固有名詞がやたらと多いこの本は、新書であるにもかかわらず決して読みやすいとはいえず、当時の私の理解がさほど深かったとも思われない。ただ、漠然とはあるが、この「わからなさ」には意味がある、と直感していた。ともすると、これがフィールドワークの本質なのではないか。しかし、この著書には、正直に書かれているだけに精読を重ねても最後の最後で、リアリティというか、実感が伴わなかった部分があいくつあつた。それはおそらく経験しないとわからないものなのだろう、と考えていた。

『テソ』には「わからない」という表現が随所にちりばめられている。「わからない」ことを「わからない」と書いてある本は稀であると思う。「彼が信頼できるのは、知らないことを知らないといえるまれな才能をもっていることだ」と高く評価されている調査協力者「オジイロット」は、ある意味では知ったかぶりを拒否する、著者の目指した理想像だったとにらんでいる。

ともあれ、何度も読んでその細部をそらんじている本の著者と一緒に連れ立って、そのフィールドを訪れる、という経験は、望んでも得られるものではなからう。「金目当て」ではないもうひとつの目的は、ここにあった。一般に人類学者は自分の行った調査の実態について著書のなかで沈黙しているだけではなく、自分のフィールドに他人が入るのを嫌う傾向にある。また、フィールドワークの方法論については誰からも、体系的には何も教わった覚えがなかった。実感のなさ、というものが絶えずつきまとっていた。

視察的な意味合いが強い前年の事前調査とは事情が異なり、今度は本格的な調査である。先生がどんな調査をするか、間近で見ることができる。そうした意味で、その時のカタクワイ行きは、非常に例外的であり、私にとり意義深いものであった。何度読んででも手に入れられなかった最後の実感のようなもの、それをこの目で、体で実感するチャンスだったのである。

III

首都カンバラでの打ち合わせや買い物済ませ、一月二〇日午前六時四〇分に今度は長島先生の運転するランドクルーザーでふたたびアチョワに向けて出発した。現地調査を開始する準備のためである。

カンバラで購入したのは、たとえば以下の物品である。オリーブオイル、ニシンの缶詰、醤油、アルミフオイル、ネガティブホルダー、包丁とぎ、キイホルダー、テーブルナプキン、キッチンペーパー、スポンジ、録音テープ、ワイン、スピリット（以上スターズパーマーケットおよびカンバラ・ロードにある「アルハン・ナムダラ」という



1998年8月オウウロジットと再会する長島先生（左）



落花生をむいて食べるアチョワの子供たち

インド人経営の食器店で購入)、洗面器、バケツ(小)、石けん入れ、石けん、キャベツ、レモン、ニンニク(以上ナカセロ・マーケット)、ロープ(サウリヤコ・マーケット)、男性用・女性用トイレの表示(マーケット・ストリート)。メモの下には先生の格言として「いつまでもあると思うな肉と酒、無いと思うな事故と借金」と書かれている。のちにこれは、金言というより予言だったことを当の先生ともども思い知らされた。

このリストの特徴的なところに解説を加えると、オリーブオイル、ニシンの缶詰は、先生のこだわりである。のちにカンバラに一人で出た際に注文品の水煮がなく、仕方なくトマトソース煮を買って帰り、ひどく怒られたことを覚えている。食材へのこだわりは、「酒とタバコ以外で不健康になつてはいけない」という先生の「立ち読み健康医学」が反映されている。

ソロタイで調査基地をオフィスとして機能させるのに必要なベッドや机などを購入あるいは注文した。多くが輸入に頼る既製品より、自前の材木からつくる注文品のほうがずっと安価なのは驚いた。ウガンダではマホガニーをふんだんにつかっていた家具をあちこちでみかける。質もよい。

いわゆる什器はありあわせのもので間に合わせるものかと思っていたので(実際私はそうしていた)、たいそう驚かされた。それらは単に自分たちの研究環境を整えるため

- 6: 私設助手としての謝金はウガンダに到着直後に100USD前払された。
- 7: 長島信弘「自筆裏語る—長島信弘『テノン民族誌—その世界観の探求』一九七三年、中公新書」中部大学国際人間学研究所機関誌『アリーナ』創刊号、二〇〇四年、一九七—一九九頁。
- 8: 長島信弘『テノン』四四頁

だけではなく、後に合流する研究協力プロジェクトのカウンターパート、マケレレ大学の研究チームのためだった。つまりベッドもマットレスも毛布も枕もシーツもランプも罎も蚊帳も、やがて来るはずのアキレス・セワヤ（社会学）、ジャグウェ・ワツダ（社会学）、ステラ・ネーマ（医療人類学）らの分とあわせると都合五人分必要なのである。都会に住むウガンダ人は一般に、地方の生活に複雑な感情を持っている。気持ちよく来てもらうには無知な私には過度と思われるほどの心遣いが必要だった、というのは、後にわかったことである。

カタクワイの役所で挨拶をし、アチヨワに向かう。ソロナイを少し外れるとターマック（アスファルト舗装）のないいわゆるマラム・ロードを六〇キロ、ウエラというところでカタクワイの役場へ至る道を外れると道はさらに悪くなってくる。

林立する小屋を見遣りながら、「おまえらはピンボーだ」アチヨワの役場が見えてくるあたりで先生が叫んだ。冗談とも本気ともつかない、おそらくは三〇年以上のテソの人々とのつきあいのなかで醸し出されるような、何ともいえない感情がこもっているようだった。

アチヨワ到着時には、予想していなかったことが起きた。なぜかわれわれに先行していた大型バスと一緒にアチヨワに停まったのである。ハイエースの乗り合いタクシーの便数も少ないこの村に大型バスが乗り入れるのは初めてだそうだった。たちまち人だかりができ、「白人が連れてきてくれたんだね、ルルルルル、アイヤイヤイヤ」喜びのコールレイション⁹がこだまする。これはこれからわれわれの行うプロジェクトとの関連を誤解させるのに十分な偶然だ



アチヨワまでの道は舗装されていないマラム・ロード

つた。

IV

それから約一〇日間、われわれは主に調査基地の設備を整える作業を行った。前年の事前調査でアチヨワを訪れたときに、彼らに調査基地となる小屋を建てておくように依頼し、その資金を預けていたはずだった。しかし、小屋は建っていない。何らかの誤解が行き違いがあつたらしく、改めて小屋を建てるための費用を見積もってもらおう。「セメントが必要だ」とオウジロット。最寄り（約六五キロ）の都市ソロナイに引き返して注文品を購入し、アチヨワに引き返す。それを何回繰り返して、いくつのセメント袋を運搬したのだろうか。注文していたベッドやデスクもできているものからランドクルーザーの屋根の上に積んできりきりとロープで縛り上げ、運搬した。このような調査基地と呼ぶにふさわしい基地をつくり上げるのを私は見たことも聞いたこともなかった。自分のトロロ県での調査では、調査者が現地に入ること、現地が変わつてしまわないように、できるだけ目立たないようにしようと考えていたので、出費も控えてできるだけ薄汚れた格好をしようとしていた（住んでいたのはたまたま知り合った大家さんのおかげで上等だったが¹¹）。その意味ではナイーブな人類学者≠透明人間というモデルにきつちりはめられていたわけだ。

いまではそれは欺瞞だと思っている。「モルモットは透明ではいけない」¹²のだ。彼らとわれわれの生活の場でもあるフィールドに、どれだけ違和感を感じ共感を持つのか。自分も含めて調査対象である、いやむしろ「対象」と呼ぶことがあまりに不適切なかたちで調査経験は構成され

てゆくのだと。

小屋の中には仕切りがあり、入り口から向かって左に先生が陣取り、右の空間が私の占有空間となった。オウジロット一家のアレンジで、夕食は鶏のスープとアタパ。「うまい鶏だ」と先生の一言(次の日はナマズのスープだった)。少しして暗がりを小屋の表へ出ると、オウジロットの息子(ステイーヴン・オウジロット。同姓同名なので以降ジュニア、シニアと呼びわけることにする¹³)が、暗がりに立っている。異母兄のダニエル・オチユネも一緒である。われわれが顔を出すのを待っていたようだ。「こうなんだよ、テノ人つていうのは。遠慮深いんだ」先生のテノ自慢。用件は無心だったようだ¹⁴。

その晩、隣室からとくとくとという液体の物音がした。つられて隣室を訪れ、ひとり飲んでいた先生とワラギを飲んだ。そのうち瓶から勝手に注いで飲んでいたら一言「じろり」。非難されたことはわかったが明示的ではない。勝手に飲んではいけない、ということか。「食事の面倒は見るが、酒は自分で何とかしなさい」。その晩は蚊が多く、小屋の泥壁にとまる蚊を二人がかりで競って叩きつぶしたが、勝負は先生の圧勝におわった。この晩の蚊は、のちにプロジェクトに甚大な被害を及ぼすことになる。

一月三〇日に初めてアチョワ・マーケットを見学した。朝早くソロナイ方面からトラックが何十台も押し寄せ、壮観であった。キャンプ横の広場はそれぞれの店で一杯になる。広場に併設された小屋は食堂となつて、持ち出しもできるの、ちよつとした仕出し屋である。マーケットでは「ざる」と「ごぎ」を購入した。牛売り場にはカリモジヨンの姿も見られる。『テノ』で指摘された近隣民族カリ



1999年1月21日われわれと偶然同時についたバス

モジヨンの牛略奪は、激化こそすれ解決する気配はなかつた。カラモジヤ地方が激烈な気候で牛の放牧が困難な乾季には、降水量の多いカタクウイなどに居候を決め込み、雨期になると、テノ民族の牛を奪つて去つていくのだ。マケレシで知り合ったカリモジヨン民族の私の友人は、「日本にも牛はいるのか」と尋ね、「いる」と答えると「それは全部われわれのものだから、返してもらおうか」と凄んだ

- 9: ①Elation. 喜び、悲しみ、警戒などを表現する叫び声。
- 10: これは完全な私の勉強不足である。特に『テノ』(二二二―七頁)に登場する吉野隆泰氏の『アフリカの歌―東アフリカの湖と丘とたち』(一九七六年、教養文庫、社会思想社)を読んでいなかったのは、失敗であつた。
- 11: 最初は知らなかつたが、私の大家は夫婦ともども大人物だつた。夫は、二〇〇四年ムハララ大学学長となつたラファエル・オウオリ教授、妻は、アパチチ県長官(BC Resident District Commissioner)をつとめるマリ・オウオリ・ニヤケチヨ氏である。
- 12: 長島信弘「自傳を讀む―長島信弘『テノン民族誌』その世界観の探求」一九七二年、中公新書、中部大学国際人間学研究所機関誌『アリーナ』創刊号、二〇〇四年、一九八頁。
- 13: この地域の同姓同名の多さには、先生もあきれいて「you are stupid」と言つていた。山田暉道にならつて命名を「あやかり」と「ちなみ」に分けるとすれば、(山田順彦、一九八八年『聲』筑摩書屋)、テノ人は、ほかの多くのアフリカ社会と同じく、「ちなみ」の論理に大きく傾いている。だから三〇年前長島先生が訪れたことに「ちなみ」、ナカシマフヒロと名付けられた子供が何人もいる。さらにこの後生まれたステイーヴン・オウジロット・ジュニアの子は、ステイーヴン・オウジロット・ジュニアと名づけられた。
- 14: 後に先生が『特別フォーラム「無心の隣アフリカ人の個人的援助要請」とのしぎあい: その意味を探ろう』『日本アフリカ学会第四二回学術大会』(於: 中部大学二〇〇四年五月三〇日)を主催し、展開した『長島信弘、二〇〇六年「アフリカ人の個人的援助要請の意味を探る」』『買島風』(中部大学国際関係学館論集(一))一七一―一八二頁)はこうした豊富な体験に支えられている。
- 15: バナナから蒸留したジンのような酒、「ウガンダ・ロウキ」として市販されているほか、村などでつくられている地酒がある。アフリカのアルコールと妖術の絶め合いについては拙稿「神屋要二〇〇七「酒に憑かれた男たち―ウガンダ・パドワにおける「問題飲酒」と妖術の民族誌」『人間情報学研究』第二巻、東北学院大学人間情報学研究所、一七―四〇頁)がある。

ものだ。マーケットを取り仕切る（お金を出してその権利を得て出店した店子から場所代を得る）男は、「彼らは、テソから牛を奪っていつて、質を落として売りにくる」と愚痴る。相場は年をとっているものは一頭一〇万ウガンダシリング、若いものは三〇万シリングなのだそう。また自然死した牛は少し安いとか。ちなみに山羊は大きさにより六〇〇〇から二万シリング、豚は三万から六万シリング。

この日、はじめて先生の雷が落とされた。食事の準備をしようとした際、近くにはいなかったからである。マーケットでマンダジ（五個五〇シリング）やカレーの団子（一個五〇シリング）、サモサ（二個五〇シリング）のようなものを買ひ、食堂もあることだし、そこで昼食は済ませたら、などと提案しようとしていたのだが、とんでもない考え違いだった。先生の「立ち読み健康医学」は徹底しており、避けられないとき以外は、栄養バランスも考えた自炊をしようとしていたのである。

その間、ダニエルとジュニアを助手に雇用することが正式に決まった。ジュニアは主に先生づきで、ダニエルは私。この決定が非常に慎重に行われたのは、ひとつには『テソ』に書かれているような助手にまつわる苦勞体験があるのだろうが、それだけではない。私の印象でも、実際テソの人々は完全に個人主義的で、直裁に言えば「めんどくさい」人たちだった。つきあいはじめが肝心なのだ。しかし、この点については、老獪な先生といえども、交渉や駆け引きに「勝っている」とは到底思われなかった。この意味では『テソ』で書かれた百戦錬磨の「物欲の強さ、というよりそれを強要的に表現する伝統的行動様式」¹⁰との戦いは、三〇年後にまた繰り返されたといえる。



長島先生とウスクのひとこと談笑する集まつてきた



オウジロツトJr.と同名の息子（2004年）

家事を依頼することになったアキテン・イマチユレットは、賃金交渉の際、満足のいく金額が提示されないと、「祈りが足りなかったからもう一度」と言つて派手なお祈りを始め、そのあとに再交渉して、調査を支える助手たちに迫る好条件を獲得していた。この彼らのきわめて個人的な「物欲」といふか「所有欲」「獲得欲」は、いふなればみな個人事業者であるかのごとく旺盛であった。

ダニエルに聞いたことがある。「いま長島先生からいくら給料をもらっているか誰かに話しますか？」

「話すものか。人間（マン）はみんな泥棒。オウジロツト・シニアにも、ジュニアにも話さない」

ダニエルはこのとき、恋人と暮らしており、子供もいたのだが、花嫁代償を支払っていなかった。これは現在のウガンダではさして珍しいことではないが、私の調べているアドラ民族の間では、コンフリクトを回避するため、当人も親も、すぐには払えなくても、やがては払う、というジエスチャーをしめすことが重要である。ところがテソではこのジエスチャーをダニエルもシニアもまったくしめていないらしく、地方行政レベルの裁判沙汰になっていた。

ここでは子供の問題は子供のものであり、親の問題は親のもので、それぞれ独自に処理され、依存関係は乏しいようである。もちろん、それぞれの相互扶助めいたものはそれなりにあるのだが、背後に働いている論理はきわめて個別的、個人主義的なもののように思われた。後に一〇件ほど観察できたLCIレベルのコート・ケースでも同様のことが言えそうで、例えば親であれ何であれ、被告と原告という当事者二人以外の名前が賠償その他のために持ち出されたことは全くなかった。

また、一度ジュエニアを伴つてウスクにも足を伸ばした。そのときの状況は先生の最近の論文「最後のアサパンーウガンダ国イテソ民族の成人式」¹⁹に簡単に触れられているとおりである。「顔に見覚えのある一人の老女が私の手を握つて言った。『ナガシマ、皆死んじやったよ。』」²⁰という現場に居合わせていた。その後、墓の写真を撮っている先生の写真が残っている。

残念なことに記録に残っていないが、その後その昔テソ研究者J・ヴァインセントが都市の調査をしたことがあるブゴンドを訪れて町が完全に消滅しているのを目撃し嘆息したこともある。

V

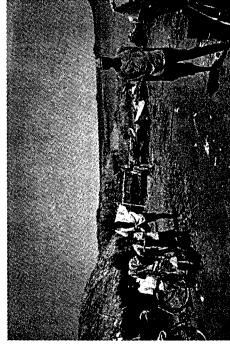
設備がほぼ整つた二月一日、もうひとりの専門家である田原さんを迎えにカンパラに向かった。二日エンテベで田原さんと合流し、カンパラで買い物。私は事前に行動をともししていたのである程度の文脈は共有していたが、あとから合流した田原さんにしてみれば、すでに何を購入するか決められていたことでかなり面食らつたらしかつた。²²

以下、メモにある二月三日から四日の買い物リスト（単位はウガンダシリング）。マットレス五万二〇〇〇、タオル二万、アルカリ乾電池四万三三〇〇、コーヒー一万五〇〇〇、ベッドシート二万四〇〇〇、ハンガー一五〇〇、平皿三三〇〇、包丁八〇〇〇、フライパン六〇〇〇、アボカド、トマト（五〇〇グラム）八〇〇、ジャガイモ（一キロ）六〇〇、キャベツ、なす、たまねぎ、ピーマン各一キロ、各五〇〇。²³

二月四日、早朝出発。ホテルに着くと田原さんが「先生



1999年ウスクを訪れ、知人の墓の写真
を撮る長島先生



滅びた都市、ブゴンドは漁村となつてい
た

23. メモにはないが、マンゴーを買つたはずだと草稿に目を通した田原さんに指摘された。確かに、長島先生のマンゴーとワラスク（昆布ポット）に入れたつめた水へのこだわりは相当なものがあったから、そうかもしれない。メモにはないところを見ると、予定になつたものをその場で気に入って買った可能性もある。

22. 田原さんのフィールドノートの記録によると、自転車二台（二四インチのもの八万四〇〇〇、二二インチのもの八万二〇〇〇）、マットレス三つ（二万七〇〇〇）を購入。それ以外にウガンダに入つてすぐに、合計四四万四五百〇〇を支払つたという。その内訳は、小屋建設費二六万（結局田原さんの滞在時には完成しなかった）、ストーブ、蚊帳、ランプ、タオル、やかん、フック、びきり、シエリカシ四つ、ジャー、カップ、ロープなどを一八万四五百〇〇（二〇〇七年一月二六日電子メールによる私信。単位はすべてウガンダシリング）。

21. 長島信弘『アナン』二二頁、Joan Vincent 1971, *African Elite: The Big Men of a Small Town*, New York: Columbia University Press. 『アナン』には「ブゴンド」とあり、そのウガンダに存在するが、西部の地名なのでこの場合は誤植であろう。

19. 長島信弘二〇〇三『最後のアサパンーウガンダ国イテソ民族の成人式』『中野文子国際観客学記要』巻三二号、一七二―一七三頁。

20. 長島信弘二〇〇三『上掲論文』一四頁。

21. 長島信弘『アナン』二二頁、Joan Vincent 1971, *African Elite: The Big Men of a Small Town*, New York: Columbia University Press. 『アナン』には「ブゴンド」とあり、そのウガンダに存在するが、西部の地名なのでこの場合は誤植であろう。

18. ウガンダの地方政府は狭いものからLC1、LC2、LC3、LC4、LC5 (Local Council) と呼ばれ、それぞれがヴィレッジ (Village) /ゾーン (zone) あるいはサブ・パリッシュ (sub-parish) という俗名があるところもある。パリッシュ (parish) サブカウンティ (sub-county) /カウンティ (county) / ディストリクト (district) に対応する。

17. 長島信弘『アナン』九頁。

16. 一USDは二四〇・二ウガンダシリング（一九九八年）、一四五四・八（一九九九年）、一六四四・五（二〇〇〇年）、一七五五・七（二〇〇一年）、一七三八ウガンダシリング（二〇〇二年）。

一度言い出した先生に翻意していただくことはできなからマリアだよ！」となぜか明るく教えてくれた。あの夜、アチヨブの小屋でワラギを飲みながら潰しあい競争をした際の蚊が先生にマリアをもたらしたのだ。私は当時運転免許を持っておらず、田原さんは国際免許をもつてはいるが、アフリカで運転したことはないとのこと、われわれは先生に延期を申し出た。先生は、ふらふらなのだろうが、「オフイスに荷物を搬入しないと」と繰り返す。「五日には、挨拶まわりだ」とも。

った。先生の運転で、予定通りカタクウイを目指すことになった。早くも出発の挨拶に訪れた大使館の駐車場の壁で「ゴリラランド・サファリ」社のトヨタ・ランドクルーザーのバンパーをちよつとがりがり擦つたものの、傍目にはしつかりしているようにみえた。

ムバレ・タウン間際でタウンにはいる最後のコーナーでは、あまりに急角度でスピードを落とさず曲がるので、道行く人が振り返つたほどだ、と田原さんはいう。先生は、「マウント・エルゴン・ホテルで休憩して、おれの様子を見よう」と言った。熱はかなり高いようである。

そこで誰かドライバーを雇つてソロテイかアチヨワまで行つたほうがよい。ドライバーには、謝金と帰りの運賃を支払えばいいではないか、と思いつき、提案したのだが、採用されなかった。

その間田原さんが、制止も聞かずにランドクルーザーの運転席に座つていた。先生と同じく言い出したら聞かない人のようだ。普段日本ではオトマのトヨタRAV4を運転しているとのことで、マニュアルのランドクルーザーの運転は心配だったが、ムバレ中心部まで行つて戻つてきた。「かんたん、(運転も)たのしい」とのことで、心配は心配だが、最後はプロジェクト・リーダーである先生の判断でとにかくソロテイに向かうことになった。

ソロテイ・ホテルに着いたときは、もうふらふらだった。万が一倒れたら肩を貸せるよう、寄り添うように部屋まで歩いた。自動車から荷物を出そうとすると、「ワインを降ろしてくれ。それが飲めるかどうかで、おれの様子を見よう」という。ご注文どおりワインを降ろして部屋まで持つていった。



私の長島先生の似顔絵をもとにアニコが描いた絵

ところが、である。その後一時間あまりして、部屋で額

のタオルを交換していた私にふたたび先生は言った。「ウメヤ、車からワインを降ろしてくれ、飲めるかどうかでおれの調子を見る」

「先生、すでに降ろしてそこにありますが」「そうか」

結局飲めはしなかった。

その晩は、田原さんと交代で看病をした。バトに行き永があるか尋ねた。「どれくらい欲しいんだ」という問いに「オール!」と答えた表情がおかしかったと、後々までからかわれた。

三〇分ごとにタオルを替えていたのだが、そのときの先生にとってそれは早すぎると感じられたようだ。「ありがたいんだが、眠れそうになるとタオル交換で起こされる」そうだ。

熱にうなされながら常に、五日に約束していた説明会と、機材搬入について気にしていた。残念なことに、携帯電話は当時ソロテイやカタクウイまでは普及していなかった。

思い余つて、「われわれで機材搬入はやりますから」と先生を説得した。

ソロテイ・ホテルに紹介されたエンゲル医師の病院に行くことをすすめるが、それを拒絶。薬だけ処方してもらつてくる。

VI

問題の事件は、二月六日に起きた。前日の二月五日、朦朧としながらも心配する先生をホテルに残して、マーケットやスーパーマーケットで購入できたものと機材を積んでアチヨワに向かう。田原さんは心配し、私に残るように主

張したが、私は一人での運転に反対し、同行することになった。まずアチヨワに行き、オウジロツト・シニアに先生の病気を報告し、説明会の延期をお願いする。その後田原さんとシニアはアクム（オコリモの屋敷がある村）に向かい一泊した。

翌朝、約束通り午前九時に田原さんはアチヨワに迎えに来た。「ベアトリス」(アムロン)が私に会いたいとの伝言。アクムに住むオコリモの娘たちは私を長島先生の実の息子と信じている、とは田原さんの言。しばらく後になつて先生の似顔絵を描いて彼女らにプレゼントしたら、その似顔を模した「カリモジョン・ウーマン」という絵をもう一人の娘アリコ・フランセスが返してくれた。

その日はちょうどマーケット・デイで、アチヨワには市がたくさん立っていた。田原さんが見たいというので、一回りだけ、と念を押し、約一〇分後にアチヨワを出発した。午前十一時にはソロテイ・ホテルで先生と合流する約束だった。

時間的な余裕はあるはずだった。田原さんも運転に慣れ、車の調子も快調だった。鬼の居ぬ間に、という訳で私たちは長島先生の噂話をしていた。今でも内容まで事細かに覚えていますが、ここでは書けない。アムリアとの分岐点を左折し、マーケットへ向かう自転車や徒歩の人々が途絶えようかというあたりで、その事故は起きた。

突如視界が閉ざされ、草木がなぎ倒される音がひとしきりして、天地が何度か逆転した。最後にかしゃん、と軽い金属音が聞こえた。事故であることはすぐわかった。瞬間的に重傷を覚悟した。

ランドクルーザーが縦転(横転ではない。後に三回転し

たことが判明)してひっくり返つたのだ。

気がつくと、私は、さかさまになつたランドクルーザーの天井に胡坐をかいている状態だった。シートベルトはしていなかつたので、奇跡的に空中に浮かんままほとんどどこにも衝突せずに、着地したらしい。

真つ暗のなか私は叫んだ。

「怪我はないですか」

しばらくして、私、田原さん、ソロテイに用があつて乗つていたオコリモの娘のアムロン、全員が仰向けになつたランドクルーザーの扉の割れた窓から脱出することができた。窓ガラスは割れていないところもあったので、粉々になつた一部から這い出す。

「ジェットコースターよりは怖くなつたねー。うーん、……でもこの負債、わたしどうしよう」

田原さんは軽口を叩いたものの結構深刻な顔をしていた。最高級のランドクルーザー。なおる見込みはなさそうだ。取り乱した私たちは、とんちんかんなことをしていた。田原さんは燃料にまみれた車体が火を噴かないか真剣におそれつつも、車輪がまだ回つていて指示器がつきつばなしの自動車にまた潜り込んで鍵を抜いた。私は、膝の上のせていたアタツシエ・ケースを探し回つていた(窓から飛び出し、五メートルほど離れた草むらに落ちていた)。

マーケット・デイだったのが悪かつた。事故の少し前、先行する自転車がランドクルーザーを避けようとして茂みに突っかかり、転倒した。私もひやつとしたのを覚えてい

24:一九九五年にセルテックスが廉価な機器を持ち込んで以来、急速にMTN、マンガーと社が競争する一大場となった。

る。しばらくして茂みから子供が飛び出した。あわててハンドルを右に切った先にはマンゴーの木があった。さらにそれをかわそうと左に切るとそこにあつた蟻塚に乗り上げて事故は起きたのだつた。蟻塚はちょうどいいジャンプ台になり、右側フエンダー側から接地して縦に三回転して裏返しに止まつたのである。

よく見ると田原さんの指からは血が流れている。怪我をしていた。骨折も疑われる。あわててバンダナで応急処置をした。

しばらくして、茂みから人が集まつてきた。喉がからからだつたから、出されるままに灰色に濁つた水を飲んだ。いろいろ考えたが仕方なくボダボダ（自転車タクシー。クッションをつけた荷台に人を乗せて運搬する）を呼んでもらい、アチヨワに一度帰ることにした。

さすがのオウジロットも驚いていた。先生を連れにランドクルーザーでソロテイに向かつたはずの三人がボダボダで戻つてきたのだ。

その後、アムロンはそのままアカムに帰すことにし、ダニエルを伴いマーケット帰りのバスに乗つて急いでソロテイ・ホテルに行つたのだが、先生はいない。もう午後二時で、予定の時刻をとうに過ぎていたので、当然といえば当然であるが、病気の具合はどうなつたのだろうか。仕方なくピックアップを運転手付きレンタカーとして独自に頼んで事故現場に向かつた。「先日もこのカーブでひっくり返つて二人死んだんだ。誰も死ななくてラッキーだつたね」と運転手。

事故現場に着くと、不思議なことに完全にひっくり返つていたはずのランドクルーザーは、タイヤを地に着け立ち



裏返しになつたランドクルーザー
(撮影田原範子氏)

直つている。

アチヨワに向かおうとする私たちの前に、そろりそろりと白いセダンがアチヨワ方面から走つてきた。運転席に座つていたのは長島先生だつた。熱が若干下がつて待つていたのだが、なかなか迎えが来ない。誰かが病氣になつたとか、田原さんがマーケットに見とれて時間をとられている可能性も含めていろいろ原因を考えたが、論理的に考えて「事故」しかないと結論づけた。ソロテイ・ホテルでいろいろ聞いて、たぶんソロテイで一台しかないだろう、という貸し出しに対応している自動車を借りて現地に来たとのこと。ひっくり返つていたランドクルーザーも、人を集めて元に戻し、さらに道路まで戻すための人集めをしてきたところだという。

「君たちは、役場にもポリスにもレポートしていない。海外では事故にあつたら、最初にポリスだ。問題を一気に解決するために今日中にソロテイに運んで行く」

ソロテイまでのながいながい牽引作業が続いた。何しろ、ワイヤーなどというしやれたものはない。ランドクルーザー

とそれを牽引するピックアップを結んでいるのはサウリヤコ・マーケットで買った、シロ縄のようなものだ。植物の繊維を編んでつくつたそれは、ランドクルーザーの重量を牽引するには、弱すぎる。一緒に購入したときの「グッドイナフだな!」という先生の言葉を覚えているが、決して「グッドイナフ」ではなかつた。途中何度も切れたそれを、その都度ダニエルがむすびなおす。先行する先

生の顔にも、運転席に座ってハンドルを切る田原さんの顔にも疲労の色が濃くなっていた。

「おい、ウメヤ、窓ガラスについている白いものは何だ」「私には何も見えませんが」「なに、あれが見えないのか」「はい」そんな奇妙なやりとりが行われた。先生は疲労のあまり、幻覚を見ているようだった。マラリアがぶりかえしているのかもしれない。

夕暮れ、ようやくソロテイの警察署に着いた。ここでもトラブル。警察の敷地に許可なく侵入したとかで、ピックアップの運転手が逮捕されそうになる。交渉の末何とか運転手は解放されたが、ピックアップは翌日まで返してもらえなかった。ダニエルが警察を恐れず、執拗な交渉をしようとするのを先生が制止した。

警察官の第一声は「何人死んだのかね？」だった。

夜のマラム・ロードをまたアチョワまでとろとろと帰り、ほつとするのも束の間、台所で先生が「ウメヤー」と叫んでいる。「あのびつしり張りついた虫はなんだ」「私には何も見えませんが」「あれが見えないのか」ダニエルを呼んで証言させたが、半信半疑である。

長島先生は一度も私たちを責めなかった。田原さんは、くやしい、と言って涙した。「おれの調査はいつもラッキ一の連続だったんだが、今度ばかりは……」ウイスキー・グラスを手にとつて呟いた。「君たち、寝るなら眠りなさい。おれは今夜は地獄まで行くからよ」と言って先生はボトルからウイスキーを注いだ。

ところが、寝ようとする、田原さんが使うはずのマットレスがなかった。「ウメヤー！ 数を間違えたのか!!」と怒号が飛ぶが、記憶の糸をたぐり寄せると、アキテン・イマ



ブッシュユカから道路に戻そうとする
(撮影田原範子氏)

チエレットにねだられて先生があげてしまっていたのだ。

翌日、ソロテイ郵便局で大使館に報告するときも一波乱あった。薬代をまだ支払っていないエンゲル病院に電話をかける約束をしていたので、手が離せなかった。自力でかけてもらおうと先生にテレフォン・カードを渡すと、「ウメヤ、カードが入らないんだよ」「私がかけるときにはそんな問題は起こったことはないですが」「おれには何でも起こりうるんだつ！（怒）」ウガンダの公衆電話用テレフォン・カードは日本のものとは違い、カードの全部が機械に吸い込まれるタイプではない。

大使館の渡辺書記官は、ゴリラランド・サファリ社に早速レンタカーの手配をしてくれた。早ければ夕方にはハイラックス・サーフが着くという。夕刻、ソロテイ・ホテルで待っていると遠くから近づいてくるヘッドライトの明かりがあった。リチャードとサンデーというふたりのパイロットが、トヨタ・ハイラックス・サーフに乗っていた。「今からアチョワに向かってくれるか?」「ヤッ」二人そろって短く答えてきばき行動するのが頼もしかった。もう夜も遅く、真つ暗だったが、先生は小屋の外で待っていた。

それからしばらくの間、調査チームにふたりのパイロットが加わった。運転手つきの場合、ゴリラランド社からかなりの出張費が出ていて、飲食も寝泊まりも運転手が自力ですることになっていた。「そうと知っていれば」大使館の渡辺書記官からも、ゴリラランド社のリディアからも反対されたセルフ・ドライブを強硬に押し切った先生はちよつと後悔しているようだった。彼らは屋敷地のなかにテントを張つてそこで寝泊まりした。アキテンがリチャードに一目惚れしたらしく、われわれによりもかいがいしく世話を焼

くので、彼らも居心地が良さそう。先生は特にリチャードがお気に入りです。その後も何度も指名していた。

VII

こんな大事故が起きても、フィールドワーカーはフィールドを離れたくないものである。渋る長島先生にカンパラ行きをせまる、渡辺書記官の粘り強い説得で、二月一〇日には、田原さんが一泊二日で単身カンパラに行くことになった。大使館とゴリラランド・サファリ社に事故の報告をするためである。次にカンパラに出たときにもっと細かい報告書を提出しなければならないらしい。

事件はこれにとどまらなかった。一五日には、デスクを外に出して月明かりを見ながら仕事をしていた先生が蠍に刺されるという事件が勃発した。「うあああ」とうなり声をあげる姿を見て、ダニエルは、「プロフェッサーは、男(マン)だ、本当の男だ」と妙な感心の仕方をしている。近くの診療所で注射を打ってもらい明け方にはほぼ回復したが、蠍の種類によっては命が危なかったとか。「おれはわかった。身をもって体験した。蠍は痛い」と何度も呟いていた。

例の事故以来、私はずっと微熱と食欲不振と不眠に苦しめられていた。たまに眠っていてもひどい寝汗をかき、不快感で目を覚ます。「かわいそうに、病気で」と、先生は同情的だった。あばらの一部も痛むので、ソロテイ病院でレントゲンを撮ってもらったが異常は見つからず、改善されないのでカンパラに行つて診察を受けたが原因不明。ソロテイ病院の診察とレントゲンは、なせか無料だった。もつともこれは誰でもというわけではなさそうで、同乗して

いたアムロンは別な日に同じくソロテイ病院で診察してもらったが、ずいぶん診察費を取られた、と先生はこぼしていた。アムロンは、首に多少違和感があり、いままではジエリカン二つ分の水を頭に垂せても何ともなかったのだが、という。ジエリカン一つは二〇リットルだから、一つで約四〇キロである。

私はこの間、LCIレベルの裁判を追っていた。少し前の選挙でダニエルが八一票を獲得し有効票は一〇八票、事務総長に選ばれていたのだ。議長もやる気満々で、ウィッチクラフトを含むいくつものケースを平行して解決していた。

二一日、前日のマーケットでは食堂になっていたあずまやで裁判を傍聴していると、ハイラックス・サーフのエンジン音が聞こえた。マケレシの調査チームがやってきたのだ。昼食はソロテイで食べてくるのでは、と裁判が始まる前に予想していたのだが、ちょうど昼どき。昼食を準備しなければならない。あわててオフィスに戻ると先生がランチョンマットを準備している。

「タイミング悪いですねえ」

このひとことで先生は激怒した。おれが調査を我慢してコーディネーターに徹しているのに、助手のお前がそんなことを言うな、しかも具合が悪い癖に無理して裁判の調査なんかしやがって、ということのようだ。この日から私と先生との間には険悪な空気が漂っていた。もうついていけないような気がしていたのだ。

三月に入つて、先生との関係も、私の健康状態も、ますます悪くなつていた。朝、お湯を沸かすこと、スープを温めること、夕方暗くなるまでにランプのホヤを磨いて、各

小屋に届けること（先生のは火をつけてほんの少しだけ炎が見える程度に絞っておく）、オフィスのプレッシャー・ランプに点火すること、以上のルーティーンはこなしていたが、裁判からも足が遠のいていた。当時の私は、アリコやアムロン、ジュニアに「ケロシンマン」と呼ばれ、灯油や明かりの管理者としてだけ存在意義があるかようになっていた。ケチがついたから、というわけでもないが投げ出してしまった裁判の代わりにはじめた商店の品揃えと価格についての調査は、裁判ほどには熱中できなかった²⁷。

三月四日に松田素二さんが合流した。早速田原さんの後見人として滞在村アカムを訪問した。事故を起こしたことに対するお詫びと事後処理を手伝ってくれたことに対するお礼、そして田原さんが今後も滞在することを認めてくれるか意見を求めるためである。伝聞だが、この訪問も順風満帆ではなかったらしい。村に到着し、颯爽と車を降りたと思われた松田さんは、歩いていたひよこを踏みつぶしてしまった。ぎよつとする松田さんと村の人々。鶏は財産の代表格である。謝りに来て損害を与える、という結果になったのである。着いたばかりの松田さんも、早々にアチヨワ事件簿に一件つけ加えたことになる。

それからしばらくした頃、先生と私の間でついに決定的な口論があつて、クビを言い渡された。

「ソロテイまで送っていつてやるから、カンパラでもトロロでも勝手に帰れ」とのこと。本気で助手をやめて日本に帰ろうと思っていた。松田さんに、「まあまあ、ウメ、そう言うな」と言われて、何とか思いとどまった。

松田さんと田原さんのとりなしのおかげで決定的な破綻



オコリモ (右) とオウウジロット (左) 2002年10月

を見ることなく、三月二十八日にエンテベを離れた。

VIII

こんなきくしやくした関係ではあつたが、その後の先生の尽力で、一九九九年九月一三日から私はJICAの専門家としてプロジェクトの正式メンバーとして迎えられることになった。しかし、わたしは自分の任地となつたセントラルのムビジ県チエゴンザ・サブカウンティでの調査を貫徹できなかった。神経を病んで二〇〇〇年二月末に中途帰国することになったからである。病は長島先生と田原さんの幻覚を目撃する、という強烈なものだった。先生や大使館の方々、関係者には大変な迷惑をかけた。申し訳ないの一言しかない。そのこともあつてこのプロジェクトは、JICAでも評価されず、むしろ失敗例とされてしまったようだ。

25 : リチャードは、この後、コリランド・サファリ社を離れ(このことは、オーナーのサイラスの不興を買つた)、USAIDの開発系プロジェクト、DISH (Delivery of Improved Services for Health) の選考手をしてしたが、プロジェクト終了とともに失職。その後何度かトロロでも運転を頼んだ。二〇〇六年五月、病のため急死。コリランド・サファリ社も現在は解体している。

26 : Local Government Act, No.1 of Section 48 (一九九七年三月十四日公布) により、最小の地方行政単位であるLC1にも国会を選出したような役職が置かれている。議長、副議長、事務総長、教育・流通秘書、保安・金融・環境保全秘書、女性委員会議長、青年委員会議長、障害者委員会議長である。

27 : もつとも、物品の調査の過程で、町でタース二万六〇〇〇シリングのジェリカンを買つてきてひとつ二五〇〇シリングで売るなど、どこも卸値と小売値との差額で合理的かつ堅実な販売をしていること、自販車の部品は驚くほど揃つていてホイールを斜に入れてグリートを流し込む自作のホイールベアリングも含めて、かなりの水準の修理技術を支えていることがわかつたのは収穫だった。調査に協力的だったオウウジの店は、当ても品揃えがよかつたが二〇〇六年現在彼はアチヨワで一番多くの牛を所有する富豪となっている。

一九九九年二月の病も、二〇〇〇年二月の病も、究極的には原因はよくわからないままです。「災因」をどこに求めるべきか全くわからなかった。周囲の人間はジュジュ、つまり呪いだと言っていた。

とりわけ二〇〇〇年の病は想像以上に重く、一時は社会的に全てを失ったような気がしていた。特に社会的に何か持っていたわけではないが、それでも二〇〇一年には笹川科学研究助成金がもらえることになり、ウガンダを訪れ(トコロ県)、前年お世話になった飯田吉輝公使に最初にお礼とお詫びをしに訪ねなかったことでちやうどウガンダにいた長島先生のお叱りを受けた。帰国後よりによつて結核に罹患した。二ヶ月半の入院生活は暗く、アフリカ研究も文化人類学も、もうやめようと思った時期もあった。アチョワとの縁も切れたかに見えた。

しかし、ほかに何ができるわけでもない。運良く年齢制限ぎりぎりまで再び日本学術振興会特別研究員(PD)に採用されて研究が続けられるようになるまでは、まさにお先真つ暗という感じだった。

アチョワとの縁は切れなかった。フィールドノートを繰ってみると、二〇〇二年一月一日、長島先生の助手、ダニエル・アルオとともに干ばつに苦しむアチョワを訪れている。その直前、先生に「京都大学人文科学研究所国際シンポジウム・国際人類学民族学会議(IUAES)2002京都會議」で出会った際に預かった二万円とその後アルオの給料二〇〇USD(プロジェクトが完了するまで助手の給料が全く支払われないので長島先生が立て替えることにしたのだ)とともに届けられた二〇〇USDとをオウジロットに届けた。配分がまた変わっていて、オウジロッ



現在ソロロティエーカンバラン間を結ぶ
テン・コーチには「テンの誇り」と、
反政府ゲリラ「神の抵抗軍」(LRA)
に抵抗した自警団「アロー・ボー
イス」の文字が(2006年8月)

トに二〇〇USD、オコリモには二〇〇円だそう。一〇〇倍以上である。ジュニアは、アチョワの役場に勤めていた。もう携帯電話を持っているから、と番号を教えてくれた。例の事故の後大使館との連絡のためにソロロティ郵便局の公衆電話まで通ったことを思うと隔世の感がある。

その年の干ばつは本当に深刻で、食料を持って行ってやった方がいい、とトロロの私の家の大家²⁸が言うので、異種混交の豆の存在を教わり、米六〇キロ、ポーション(トウモロコシの粉)二袋、豆二〇〇キロ、塩一〇袋、クッキングオイル四リットルとともに運んだ。田原さんにもお金を預かっていたので、米四〇キロ、ポーション一袋、豆一〇〇キロ追加。

二〇〇三年六月、反政府ゲリラ「神の抵抗軍」(LRA)が、突如アチョワに侵攻したという報道に驚く。八月には政府は住民の武装を認め、自警団アロー・ボーイズが結成された。長島先生もウガンダを訪れる予定とのこと。この年はアチョワには行かなかったが、七月二日にアチョワを去り、当時カンバラ郊外に住むイトコ宅に下宿してカウエンベのマガンジヨ職業訓練校に通っていたダニエル・オチユネとマケレレ・ゲストハウスで八月二日に面会している。

彼は、LRAが侵攻してきたときのことを言葉少なに語ってくれた。最新兵器で武装した強力な軍隊だったそうだ。その後、ゲリラは派遣された国軍によって撤退するが、国軍の兵士の身の回りの世話をしていたダニエルの妻は、撤退する国軍兵士と行動をとともにした、という。今子供は父オウジロットが育てている、とも。陽気だったダニエルの顔から笑顔が消えていた。

翌二〇〇四年八月四日、渡しておいた一〇〇USD分の食料を積んだランドクルーザーでアルオがトロロにいる私を迎えに来ることになっていた。その後、アチョワへ。前年のLRAの侵攻で、アチョワの人口三万四〇〇〇人のうち四〇〇人が死んだという。身内では少年一名が拉致され行方不明となっており、二名が殺された²⁹。

ダニエルは自動車修理工の資格は取ったものの仕事が見つからず、カンバラにいた。南テソ民族がいるトロロでの就職を含めていろいろ当たってみたが、難しそうだった。偶然にもマケレレ・ゲストハウスのレセプションニストの父親が昔ワスクでオウジロットの同僚だったことがわかり、彼が力になると言ってくれたのは救いだった³⁰。

IX

LRAの侵攻は生き残ったアチョワの人にも底知れないダメージを与えた。特別研究員の任期も切れた二〇〇五年、東北学院大学に奉職した最初の年は、ウガンダ行きは自粛したが、すでに携帯電話をもつようになったアチョワのジュニアとは連絡を取り合っていた。しかし、あまりいい知らせはなかった。ジュニアは、足を骨折して重体。シニアも健康を害しているという。「エデケ（神ないし悪霊と訳しておく）の仕業だ」とも。「エデケはすべての不可解な現象、混乱、無秩序に対する究極的説明であり、同時に反秩序に対する神秘的制裁力（すなわち秩序維持力）の根源でもある、といえそうである。つまり、エデケは世界の存在原理であり、そこにエデケの恐ろしさがあるといえはしまいか³¹」相手が「世界の存在原理」では、事態は深刻である。だが、電波状況のよくないアチョワの携帯との国際電



ソロテイ・マーカーケットの喧噪
(2006年8月15日)



LRAへの怒りを露わにするオコロモ
(2004年8月)

28. オウオリ夫人は、有機農法の現地NGOの運営が本誌に評価されてRDCに任命されたことを受けて、農業の新しい動向にも詳しくなった。
29. K123 (ケートン・サートイ・トゥー)。カンバラ郊外カウエンペにあるFICA (Farm Inputs Care Centre LTD) を通じて入手できる。
30. その年アカムを訪れた田原さんによれば、アカムでは、小屋に立てこもっていたところ、糞尿をかけられ小屋ごと焼かれた人も数多くいるという。小屋の扉は、軒並み持ち去られた。焼かれた小屋の中には、田原さんが住むはずだった（高高一度も住んでいない）小屋もあった。
31. もともと二〇〇六年現在、ダニエルから彼には連絡はないという。
『テソ』七五頁。

話では、わからないことが多すぎた。

幸運なことに二〇〇六年、またしても年齢制限ぎりぎりで応募した科学研究費補助金（若手研究(B)）がもらえることになり、また八月にアチョワを訪れた。まだ日本を去つ前にジュニアに電話したところ、体はもういいというのでほつとしていた。なぜかシニアのことになると歯切れが悪いとは思ったが、あまり気にしていなかった。

八月一四日、米の安いムバレのナムボロゴマで一〇〇キロ（九万シリング）。翌八月一五日、ソロテイ・マーケットで豆一〇〇キロ（六万三〇〇〇シリング）、クッキングオイル五リットル（九五〇〇シリング）、砂糖五キロ（九〇〇〇シリング）を積んでアチョワに向かう。

今回初めてビデオカメラを積んでいた。ソロテイ市街からマラム・ロードに入り、感慨深い事故現場を通って、アチョワへの道行きをカメラをほとんどずっと回していた。

予想では、長島先生の建てた小屋の前に車が停まった途端にジュニア夫妻が飛び出して来るはずだった。しかし、誰も出てこない。裏に回った。先生が毎晩デスクを出して月を見ながらグラスの底を眺めていた、蠍の出現した真庭には、洗濯をする見知らぬ娘がいた。「オウジロットはど

こですか?」「どのオウジロット?」「ステイヴン」「役場よ、アムリアの」要領を得ないやりとりが続いた。信じられないことだった。LRAが駐留しているときですらアチヨワ・キャンプに居座っていた、キャンプの守り神のようなオウジロットを、しかも彼の屋敷のど真ん中で探す羽目になろうとは。

「役場で働いているステイヴンのお父さんのこと。ムゼー(老人)！」私は声を張り上げた。「ああ、あの」

指さす方向には、老人が腰掛けていた。ビデオカメラを回しながら、ゆっくり近づいた。できれば見つからないように。久しぶりの邂逅を驚きからはじめたかった。

驚いた。彼は、脳梗塞で半身不随となっていた。「おまえはこの知らせを受けていなかったのかね。脳の半分をやられて、うまく喋れないんだ」しかも、アムリアにいるジュニアとは絶縁状態らしい。オウジロットは、慎重にゆっくり言葉にしていく。オコリモとダニエルが飛んできて、彼の言おうとすることをまとめようとする。カンパラで職探しに失敗したダニエルは「村に帰れ」という先生の助言を容れて帰ってきたのだという。

長島先生は、オウジロットに二〇〇USDの送金を一回約束した。最初の二〇〇USDは、封筒に入って通常郵便で届けられた。しかし、一回目が届かない。もうジュニアを信用することはできない。私が動けないのをいいことにあいつが盗つたにちがいない、とオウジロットはうなづいた。

私はしばらく逡巡したが、財布から二〇〇USDを取り出し、オウジロットの目の前に並べていた。私が長島先生の実子と信じるアチヨワの人々の前では、それが取り得る正しい唯一の道であると信じた³³。たとえそれが親と子が自



職がなく村に帰ったダニエル
(2006年)



プロフェッサー・ナガシマへ伝言を語る
オウジロット (2006年)

立したテソ人には理解しにくい「ジヤバニーズ」のふるまいでしても。

「みんな、知っているだろう、プロフェッサー！ナガシマは嘘つきじゃない、何か理由があるはずだ、だが、父の約束はまず息子がこの場で果たそう」

「もう誰も信用できない」とオウジロットは呟く。「銀行口座への入金は大ニエルに任せたら」という私とオコリモの提案を即座に拒絶した。田原さんの名前が出たときに笑みを見せたが、自分を取り巻く状況の不自由さと、それから来る不機嫌さを隠さなかった。

アチヨワ・キャンプを率いていたオウジロットの影響力は、見る影もなくなっていた。キャンプの人々は、みな彼がいないものとして扱っていた。肺炎を患うオコリモは、自分たちの世代の将来を悲観した。

帰り際にダニエルがオウジロットから見えないような角度で無心。「ごめん、また今度」レンタカー代とガソリン代を除くと、本当に有り金全部だったのだ。

この顛末を先生に報告した³⁴。実際には、郵便で送金することの危険性を考えて送金を控えていたのだ。ジュニアは無実だったわけである。オウジロットには、説明して誤解を解いたが、もはや病を得て頑迷になったオウジロットは容易に納得しなかった。

先生は、個人主義的な性格の強いテソ民族は社会組織として、常に決裂、分裂する要素をもつ、と考えているようだ。そもそも、「友人とは潜在的な敵である」³⁵とされる社会である。ダニエルがかつて語つた「人間(マン)は泥棒」という人間観も、そのような傾向を裏づけているかも知れない。

X

以上が現在語りうる、私と長島信弘先生と、アチヨワについての断章である。執筆の依頼文の添え書きには、「私は学問・性格共にどちらかといえば『悪名』寄りの人生を歩んできたと自覚しておりますので、この際手厳しい御批判を受けるのも一興とおおらかな気持ちであります」とあった。批判ではないが、なかには通常は語るのをはばかれるようなことも、あえて書いてみた。「人間が生活していて、それを理解しようとするれば、きれいごとですむはずがない」³⁶のだから。また、「書くことにタブーを課さないのが俺の原則。書きたいことを書いてくれ」³⁷という力強い言葉もいただいている。

このように、これまでアチヨワとの関わりで出会った事件は数知れない。ランドクルーザーの事故はこちら側の問題だからひとまず措くとしても、昔からの問題であるカリモジヨンの襲撃についても多くのことを耳にしている。I RAの侵攻、ダニエルの妻との別離、オウジロットの病とジュニアとの絶縁など。先生とも親しくしていたリチャードの急死などここでは詳しく書ききれなかったことも多い。

さて、私は一連の経験を通じて『テソ民族誌』を読んで感じた、最後の「わからなさ」を克服できたか。答えは「否」である。わからなさは、もつと深まり、複雑になってきた。

確かに経験してわかったことはいくつもある。テソピールの味や彼らの「裁判好き」³⁸は実感を伴って観察した。カリモジヨンにも会った。しかし、つきあいが深くなればなるほど、また新たな疑問がわいてくることも事実である。



自分の境遇を筆者に話すオウジロット (2006年)

社会や個人は、生きている限り現在進行形で変化しており、完成形態ではありえない。しかもそれらの認識のもとでとなるはずの経験の頼りなさ。それらを考えて思い浮かぶのはくやしいがまたしても『テソ』の一節である。対象自体に反復性、恒常性、整合性を期待できないという不確定性、文化を個人が内面化していく過程と結果には個人差があること、秩序感覚をもたない外部者にとって資料や分析モデルにはつねに検証困難なずれやひずみがつきまとうこと³⁹。『テソ』で前提となっていたこれら三つの民族誌の困難が身にしみる。

従って、というわけでもないが、この雑文にも「オチ」らしい「オチ」はない。ありえない。また今年も八月には、私は彼らに会いに行くことだろう。そしてまた新たなエピソードが、私のフィールドノートにつけ加えられるに違いない。

さらに、四つめの困難。本稿で書かれたことのいくつかについては、長島先生や田原さん、松田さん、など同じ時間・空間を共有した人の中からですら、異論が出ることは想像に難くない。フィールドに誰かとともに赴き、その経験の解釈をつきあわせてみると、不思議なことに、人間は

33. もちろん、オウジロット、オコリモは、私と長島先生に血縁関係がないことは知っているはずである。

34. そういうつもりではなかったが、物質の類についても報告したところ、長島先生から程なくして三〇〇USDが郵送されてきた（もちろん通常郵便）。

35. 『テソ』八四頁。

36. 長島信弘「死と病いの民族誌―ケニア・テソ族の災因論」（一九八七年岩波書店）、四三五頁。

37. 二〇〇七年一月二六日、電子メールによる私信。

38. 『テソ』一一二頁。

39. 『テソ』一一四頁。

見たいものしか見ていないことに嫌と云うほど気づかされる。事実認識の理論負荷性というほどのものではない。それは理論以前のものである。この雑文の副題として『テノ民族誌』異聞』と名づけた所以である。

* * *

長島先生に初めて会ったときのことを今でもよく覚えている。一九九三年二月一八日から二〇日にかけて当時まだ西ヶ原にあった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と慶應義塾大学で開かれた「アフリカ・米・日アフリカニスト会議」の最終日、G・マイケル教授とI・N・キマンボ教授の講演会の席だった（慶應義塾大学三田キャンパス西校舎5B教室）。公演の中の親族関係の専門用語に同時通訳が詰まったとき、フロアから「そのままでもよろしいのです」とひとこと発言した人物がいた。凄まじい存在感。

もとよりフロアからの発言が求められている場ではない。前日までの分科会でもレセプションでも見かけなかったその人物の顔をのぞき込んで驚いた。著書の著者近影や一橋大学の大学案内で写真を見たことがあったのでそれと知れた。

当時先生は学会にも姿を現すことがなかったから、アフリカ研究を志したばかりの私にとっては活字だけで名前を知る、雲の上の人だった。その後、ありったけの勇気を振り絞って、いまでは少なくなった構内廊下の灰皿で煙草を吸う先生に、ワープロ（まだワープロ専用機で、パソコンは持っていない）でつくった名刺で自己紹介した。一

瞥するや名刺に刷られた「宗教人類学専攻」という名乗りに対し、「宗教人類学？」と言を傾けて唸り、「人類学を細分化してはいけません、どなたかの悪影響を受けておられるのではないですか」と初対面にして批判された。そのとき感じた頑固親父ぶりは、今もって変わらないように思える。

最近の論考で、「主観と客観の間の境界は広大で複雑だ⁴¹」と長島先生は言う。私が誤解していないとすれば、この表明は、民族誌の困難に正面からとりくみ、事実関係の徹底的なすりあわせをせずして、「間主観性」という觀念に乗っかって何か言つたつもりになってしまう風潮に対する、「最後のシマウマ⁴²」からの頑固親父らしいお説教である。そして、それがたぶん「テノ流」でもある。たとえ一時的にであれかつて世代を超えて語り合った仲間との決裂や分裂を意味するとしても。

40：先生は『観馬の人類学』（一九八八年 岩波新書）の著者として一九八八年にJRA馬事文化賞を受賞しており、それを大学広報が用いていると記憶する。

41：長島信弘「長島信弘（一九三七—）『死と病いの民族誌』ケニア・テノ族の災因論』岩波書店、一九八七。小松和彦、田中雅一、谷本原毅彦、渡辺公三編『文化人類学文庫事典』（二〇〇四年、弘文堂）五三三頁。

42：長島信弘 二〇〇三、土掘論文 二〇頁。